



和泉川は横浜市西部の台地にはさまれた谷底低地を流れる小さな河川で、崖線からわき出す湧水を水源としています。

中下流部の沿川には現在も農地や斜面林が残っていますが、横浜市の中心地に近いことから、沿川の都市化が急激に進んでいます。その結果、昭和40年代にはちょっとした降雨でもすぐに水が溢れるような状態となり、鋼矢板の護岸が設置されて深く掘り下げられ、水辺に近づけない川となってしまいました。また、水質の悪化もひどく、まさにドブ川でした。



横濱市では、昭和62(1987)年に「和泉川河川環境整備基本計画」の検討に着手し、流域の小学生によるワークショップなどを行いながら、河川に隣接する土地を活用し、公園整備や緑地保全など他事業と一体的に整備する計画を策定しました。



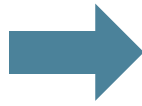
市街地の中にいまでも樹林や緑地の残る和泉川沿川

その後、平成元(1989)年に「ふるさとの川モデル事業」の指定を受けたことから計画の具体化に着手し、平成6(1994)年に「地蔵原の水辺」、平成8(1996)年に「東山の水辺」、平成9(1997)年に「関ヶ原の水辺」、平成10(1998)年に「二ツ橋の水辺」など拠点的整備を実施しました。

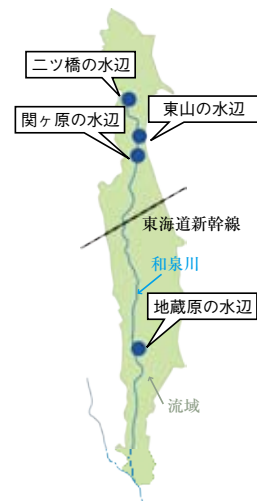
例えば「東山の水辺」では、川幅を広げ、周辺地形となじんだ流路や河岸処理を行うとともに、左岸側の斜面林に対して河川空間と一体的に整備を行うことで、緑豊かで市民に親しまれる空間を創出することが出来ました。



整備前の状況（東山の水辺）



整備後の状況（東山の水辺）



和泉川流域と拠点の整備

整備された水辺では、子供たちが水遊びやザリガニ釣りなどに興じ、多く
整の人が散策を楽しむ姿が見られるなど、市民に親しまれる空間として賑わいをみせています。

現在、和泉川流域には8つの水辺愛護会が結成され、川の清掃活動を地元住民自ら定期的に行っていますが、こうした活動を通じて川を身近に感じ、川に関心を寄せる人が増えるなど、水辺空間が地域に根ざした存在となっています。

下水道普及率の向上に伴い、平成5（1993）年まではBODが10mg/ℓ以上あった和泉川の水質も、平成8（1996）年以降は5mg/ℓ以下を達成していますが、このような水質の改善と生物の生息・生育環境に配慮した河川改修の実施により、生き物の姿も増えています。和泉川では「地蔵原の水辺」において魚類の定点調査が昭和59（1984）年から実施されていますが、平成8（1996）年に初めて魚類（フナ属、ドジョウ）の生息が確認されました。また、平成17（2005）～18（2006）年に実施されたモニタリング調査では、和泉川全体で18種の魚類が確認されるなど、出現種類数の増加と魚類相の変化が伺えます。

現在、横浜市では、昭和30年代の水量、水質や清澄な湧水の再生を目指して、平成14（2002）年に定めた「和泉川流域水循環再生行動計画」に基づく様々な施策を推進しています。

なお、「東山の水辺」と「関ヶ原の水辺」の整備における空間デザインに対して、平成17（2005）年には「土木学会デザイン賞最優秀賞」が授賞されています。



現在の東山の水辺

